

1993年11月、「ふれいざー」34号に初めてルツ子さんをご紹介してから23年。今や世界的なコンサート・ピアニストとなった山岸さんが、2012年、2013年に続き、今回3回目のチャリティーコンサートのために来加されます。ここでは、2012年に本誌に掲載したインタビューと今回新たに答えいただいたものを合わせて掲載させていただきます。

今回のコンサートで、ラフマニノフを選んだのは？ ラフマニノフへの思い入れなどありましたらお聞かせください。

山岸： 私がイタリアのフィレンツェで8年師事したラザール・ベルマン先生は主にリスト弾きとして世に広く知られました。先生はこのハンガリーの作曲家フランツ・リストの直系弟子にあたり、同じモスクワ音楽院出身であるラフマニノフとも深い関係があります。

曲目解説者の岸本礼子氏がその系譜を書かれていますので、以下に引用させていただきます。

"モスクワ音楽院出身のL.ベルマンは、同音楽院在学中、名教師として名高いA・ゴリジェンヴェイゼル教授（ゴールデンワイザー）に師事。そのゴリジェンヴェイゼルは同音楽院在学時に級友であるS.ラフマニノフとともにA.ジロティ教授に師事。ジロティは年の離れた従兄弟・ラフマニノフにモスクワ音楽院への入学を勧めた人であり、また、リスト晩年の高弟として最も有名な20世紀初頭のロシア音楽界の重鎮であった。"（岸本礼子著～山岸ルツ子ピアノリサイタル演奏会評より抜粋）

このように、リストとラフマニノフの正統な流れを汲むベルマン先生に師事したことにより、ロシア・ロマンティシズムの影響を強く受け、長らくリストを研究してきた後に時代を追って現代の私達の感覚に最も近いと感じられるラフマニノフの音楽に自然と魅せられるようになったのは私の中ではごく自然な流れでした。

また、ラフマニノフはショパンやリストと同様、作曲家としてだけでなく、類稀なるヴィルトゥオーゾとして亡くなる直前までピアニストとして演奏活動を続けた人でもあり、ピアノの魅力、演奏効果を最大限に引き出した作曲家として、ショパンやリスト同様にピアニスト達にとって無くてはならない存在と言えます。

政治的背景から故郷ロシアを後にし、アメリカで生涯を終えることになったラフマニノフのその波乱万丈の音楽家人生と、遠い異国で故郷ロシアに強烈な想いを残し続けた音楽家の心情は、これまでの人生の大半を海外で過ごしてきた私にとっても重なるところがあり、多国籍文化を築いてこられたカナダ在住の方々にとっても、多くのメッセージを彼の音楽から感じられるのではないかと思います。

本気でピアニストを目指すようになったのはいつ頃からですか？  
きっかけは？

山岸： 9歳の頃、フィリピン・マニラ市でのコンサートがきっかけでした。1年にわたる準備期間をもって臨んだ7曲のソロ・プログラムとオーケストラとピアノのための協奏曲をコンサートで、演奏した時の緊張感と高揚感、幾度もの壁を乗り越え本番を迎えた後の達成感、それらを体験してから、心の中で密かにピアニストの道の本気で目指すようになりました。

ピアノ以外に進みたい道、なってみたい職業がありましたか？

山岸： 子供の頃、純粋に憧れの気持ちでバレリーナになりたいと思ったことはありましたが、実際にはピアノの道以外に考えていなかったように思います。

バンクーバーでレニングラード派の基礎を学ばれましたが、そのきっかけは？ それまで学んできたピアノとの違いをどのように感じましたか？

山岸： 転勤でバンクーバーに住んでいた両親のもとに遊びにいった折、調律師の紹介でロシア人ピアニストの先生に出会い、レッスンを受けたのが始まりでした。これまでの漠然とした言葉での指導法とは違い、的確な練習方法、実際に弾いてみせてくれ、言葉を越えたところでのストレートに伝わってくる音楽の指導法に、目からうろこ状態となり、留学を即決しました。

97年までコンクールで華々しい活躍をしておられましたが、どんな音楽観に基づいてその後コンクール参加をしないことにしたのですか？

山岸： コンクールでは勝つための演奏が求められ、それは一方性で閉ざされているように思われます。本来演奏家が目指すコンサートとは、聴き手と弾き手の双方向の関係性の中で生まれ開かれたものであるという私本来の捉え方から遠のくように思えたからです。

ヨーロッパでの音楽活動は、ご自分の音楽にどんな影響を与えたと思いますか？

山岸： 海外での音楽活動の中で、心で奏でる音楽とは、言語・国境の壁を超えるものであるということを感じてきました。ヨーロッパでは文化の重みを感じると共に文化とは何かを考え続け、それは精神性の豊かさであるということに気がきました。それらは、自分は自分でしかなく、自分という一人の人間を探究すること、自分の音楽を奏でることで、全ての垣根を越えて人と人の交流が音楽によってなされ得るのだという考えに至る体験でした。

恩師のラザール・ベルマン氏が亡くなるまで数年間、フィレンツェで彼に師事しておられましたが、氏との出会いはどのようなものでしたか？

山岸： 先生との出会いはオランダで行われたホーランド・ミュージック・セッションでのレッスンでした。ヨーロッパで勉強したいと思い、先生を探し求めてオランダの講習会に行ったところ、当初お目当てだった先生のスタイルが自分には合わず、他の先生のレッスンも受けたいと事務局に申し出たところ、隣でクラスを持っていたのがベルマン先生でした。

ラザール・ベルマン氏はリストやラフマニノフなどのロシア音楽の最も偉大な継承者であると言われますが、彼の音楽のどんなところに惹かれましたか。彼からどんなことを学ばれましたか？

山岸： 先生は「音楽はパーソナリティだ」とよくお話されていましたが、まさに先生の演奏の魅力は先生そのものであるところでした。それはスケールの大きさであったり、懐の深さ、高貴さと繊細さ、哲学、ユーモア、チャーミングさ、暖かさ、時にはデモーニッシュな音楽であったり、天使の声であったり……、その音楽は、唯一無二の先生という一人の人間の個性そのものです。ベルマン先生のレッスンでは、作曲家の意図を出来る限り正確に汲み取ろうと真摯に向き合う楽譜の先に作曲家という一人の生身の人間と向き合うこと、その作曲家と向き合う自分という人間と向き合うということ、先生自ら音楽に向き合われる姿勢から教えられたように思います。

(次ページへ続く⇒)

ベルマン氏が亡くなったとき、最後の弟子として何をお考えになりましたか。

山岸： 私の他にも世界各国に先生のお弟子さんはいましたが、先生のフィレンツェのご自宅のすぐ近くに住み、ベルマン先生御夫妻の身近にいたこともあって、私のもう一人の師でもあった奥様のヴァレンティナ先生のことばかり案じていました。しばらく月日が流れてからは、演奏家としての真の自立の機会を先生から与えられたのだと考えるに至り、学んだものを基に自分の演奏の確立を目指すとともに、先生の精神性が反映された教を演奏や講座や生徒達へのレッスンなどを通じてより多くの人々に伝承していきたいと思うようになりました。

これまでに挫折を感じたことはありますか？ どのように乗り越えられましたか？

山岸： 大きな壁にぶち当たることは何度か経験しました。けれども、試練は乗り越えるために与えられているものだと考え、苦しい暗中模索の状態でも乗り越えた先には必ず飛躍が待っているという希望をもって、あきらめずにやり続け乗り越えてきたように思います。

ピアノを演奏するときに心がけていることはありますか？

山岸： それは閉ざされているものではなく開かれているものであるか？ということに絶えず注意を払っています。閉ざされているものはどれほど美しく完璧でも、人の心に届きません。開かれているものは、たとえ完璧でなかったとしても人の心に届くものであると思うからです。普段の練習の時から、冷静に客観的でありながら全身全霊で弾くことを心がけたいと思っています。

クラシック音楽以外のジャンルで音楽を聴くことはありますか？ または好きな音楽、音楽家は？

山岸： ボサノバ、ポップス、ジャズ……、ジャンルにはこだわらずなんでも聴きます。クラシック・ギター音楽は特に好きで、バッハやタレガの曲はいつ聴いても変わらず好きで、愛してやまない作曲家です。

これまでで最も印象に残った演奏は？ または忘れたいエピソードはありますか？

山岸： ベルマン先生が亡くなる1年前に、引退を決意されたベルリンでのリサイタルの3週間ほど前、ご自宅で私にリハーサルを聴いてくれとおっしゃって弾いてくださった演奏が深く印象に残っています。その少し前、引退を決意された話をしてくださったときに「コンサートをやめると、今より少し貧乏になるけれど、自分は今まで背負ってきた肩の重荷をようやく降ろせるんだよ。それは本当に重かったんだ」と泣きながらおっしゃったのが今でも忘れられません。74歳。亡くなる1年前の話でした。凝縮された一瞬に全てをかける先生の演奏は、今も先生の引退決意のお話とその1年後の先生の死と重なって、深く心に刻まれるものとなっています。

スタジオ録音はしない主義とお聞きしていますが、それはなぜ？

山岸： 特にスタジオ録音をしない主義という訳ではないのですが、もともと、コンサート会場に聴きにいらしてくださった方々の間からリサイタルの録音をCDにして欲しいというご要望を頂きライブ収録アルバム作り始めたのがきっかけでしたので、そのまま自然な形で続けていた結果といった感じです。でも、音楽は時間の芸術というごとき、一瞬の内にその全てが凝縮される音楽はやはりライブであってこそ。コンサートを聴きにいらしてくださった方々にその記念的なものとしてお届けできたらという想いのもとで、スタジオ収録ではなくライブ収録を続けてきました。

コンサートでは何を考え、大切にしておられますか？

山岸： 1999年のデビューリサイタル以来、国内外の様々な場所で演奏をして参りましたが、毎回一つの舞台とは実に多くの人々によって創られるものだと感じて参りました。コンサート開催に向けて何ヶ月も前から膨大な準備作業に携わる人々、当日会場に集まる人々がいてこそ、演奏者は初めて舞台に立って演奏することができます。そして、演奏とは、様々な場所で様々な人生を生きている人々がその日その時間その場所に集まり、弾き手と聴き手が音楽を通して双方向に働きかける流動性の中から生まれてくるものだと感じて参りました。1回1回のコンサートで心の底からあふれ出る感謝の想いを大切に、また、この奇蹟のような時間と空間を少しでも実り豊かなものとして会場にいる方々と共有できるよう、全身全霊で真に音楽と向き合うことを大切にしたいと考えています。

好きな作曲家、楽曲を教えてください。

山岸： ショパン、リスト、バッハ、モーツァルト、シューベルト、ベートーベン、いずれも好きな作曲家です。大好きなバレエ音楽をピアノ曲用に編曲したストラヴィンスキーの「ペトルーシユカ」やプロコフィエフの「ロミオとジュリエット」などの作品も好んで取り上げています。

今後なりたいことは？

2007年の国立天文台でのリサイタルをきっかけに、学術と芸術の融合文化の振興活動をライフワークとして続けて参りました。以来、様々な学術機関からお招き頂き、多くの研究者の方々との出会いがありましたが、特に科学者にはA.アインシュタインやW.K.ハイゼンベルグのように、一度音楽家を志した人や音楽に造詣の深い方がたくさんいらっしゃいます。古代ギリシャの数学者ピタゴラスによって西洋音階の原型が創られ、その後も数学者によって音律の考案がなされてきた西洋音楽は、もともと古代ギリシャ時代に、天文学、算術、幾何とならんで数的4科として扱われていた学問であり、そのルーツは大変興味深く、科学者・数学者の方々と精神性が通じるところが多くあるように感じています。一昨年に東京大学数理研究科にて「音楽と数学のタベ」と題して、数学者による音楽と数学に関する講演とピアノコンサートが行われましたが、その関係性を数学者によって解明されることは、双方の分野にとっても大変意義深いことでした。様々な分野で互いに触発されながら相互理解を深め、何か新しいものが生まれたらそれほど素晴らしいことはありません。これからも、分野、国境を超え、様々な形での融合文化の振興活動を続けて参りたいと思っています。

今回のコンサートへの想いをお聞かせください。

2012年 Christ Church Cathedral における第一回目の東日本大震災復興支援チャリティコンサートより出演させて頂いて参りました。このチャリティコンサートの主催者である、ふれいざー紙によって紹介された AMDA が掲げる人道援助の三原則に深く共感すると共に、音楽を通して何かできることをしたいという想いの中で、このような機会に再び参加させて頂けることに感謝しております。

東日本大震災、熊本地震のみならず、世界中で災害が起きている中、国境や文化を超えて人と人が繋がる働きかけは人間が本来もっている自然な欲求ではないかと思えます。生まれ故郷バンクーバーでのチャリティコンサートを通じて、カナダと日本、皆様と大切な方々への想いを繋げるコンサートとなりますよう、全力を尽くして参りたいと思えます。

最後に、バンクーバー留学時代より応援してくださり、チャリティ活動の機会を授けてくださったふれいざー紙の宮坂まり氏と2014年に他界された宮坂功氏に心からの敬意を込めて感謝申し上げます。宮坂功氏への追悼の意と被災地復興、世界平和への願いを込めて演奏して参りたいと思えます。